



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

国語力向上を図る学校カリキュラム作成に関する基礎的研究： 国語科の新しい授業づくりの視点(プロジェクト研究)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-02-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大熊, 徹, 笠井, 正信, 千田, 洋幸, 黒石, 陽子, 山田, 有策, 佐藤, 正光, 北澤, 尚, 石井, 正己, 宮寺, 庸造, 木下, ひさし, 小山, 恵美子, 浅見, 優子, 中村, 和弘, 福田, 淳佑, 吉岡, 裕子, 中山, 美由紀, 野中, 三恵子, 扇田, 浩水, 村上, 恭子, 鍋島, 尚子, 石川, 直美, 愛甲, 修子, 工藤, 哲夫, 杉本, 紀子, 宇佐見, 尚子, 浅田, 孝紀, 仁野平, 智明, 鈴木, 芳明, 中山, 至, 西村, 諭, 若宮, 知佐, 高松, 美紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/90363

国語力向上を図る学校カリキュラム作成に関する基礎的研究

— 国語科の新しい授業づくりの視点 —

研究代表者 東京学芸大学国語教育講座 大熊 徹
附属世田谷中学校 笠井 正信

目 次

1. はじめに	笠井 正信	20
2. 研究の内容	福田 淳佑	21
2. 1 「国語力」に関する問題点と課題		
2. 1. 1 『発達段階に応じた「国語教育における重点の置き方」のイメージ図の作成	福田 淳佑	21
2. 1. 2 「学習指導要領社会科（Ⅱ）（第七学年－第十学年）（試案）昭和二十二年度」の「一般社会」に見る「各教科等を貫く言語活動」	工藤 哲夫	22
2. 1. 3 国語学力をめぐる主要論文の検討（昭和20年代から30年代を中心に）	高松 美紀	23
2. 1. 4 「国語力」探求の問題点と今後の課題	笠井 正信	23
2. 2 古典学習の問題点と課題		
2. 2. 1 研究の方向	杉本 紀子	23
2. 2. 2 現状と問題点	杉本 紀子	24
2. 2. 3 中学校での古典学習における課題	野中三恵子	25
2. 2. 4 高校での古典学習における課題	宇佐見尚子	26
2. 2. 5 これからの国語教育への課題	佐藤 正光	26
2. 3 現代文（文学、批評、論説）学習の問題点と課題		
2. 3. 1 現代文の領域に求められる国語力	千田洋幸・扇田浩水	27
2. 3. 2 提案する单元構想		
2. 3. 2. 1 「詩と詞を読む」	扇田 浩水	28
2. 3. 2. 2 批判的思考力を育成するための单元構成	仁野平智明	28
2. 3. 2. 3 情報化社会における「表象」	若宮 知佐	29
2. 3. 2. 4 新たな価値観の創造	鈴木 芳明	29
2. 4 言語生活・言語体系の学習に関する問題点と課題		
2. 4. 1 漢字・文法指導の問題点と課題	愛甲 修子	30
2. 4. 2 言葉に関する指導について	石川 直美	31
2. 4. 3 音声言語指導から表現指導へ	浅田 孝紀	31
2. 4. 4 言語生活・言語体系の学習の活性化のために	北澤 尚	32
2. 4. 5 国際理解教育としての「アジア心の民話」	石井 正己	33
2. 5 読書活動・情報活用と「国語力」の関連についての課題		
2. 5. 1 読書記録振り返りの有用性についての仮説	福田 淳佑	33
2. 5. 2 附属学校図書館における児童生徒の活動の実際		
2. 5. 2. 1 附属世田谷小学校の活動	吉岡 裕子	34
2. 5. 2. 2 附属小金井小学校の活動	中山美由紀	34
2. 5. 2. 3 附属世田谷中学校の活動	村上 恭子	35
2. 5. 3 読書記録蓄積システムについて	鍋島 尚子	36
2. 5. 4 想定できる活用場面	扇田 浩水	36
2. 5. 5 実践上の今後の課題	笠井 正信	37
3. 今年度の成果と今後の課題	大熊 徹	37

国語力向上を図る学校カリキュラム作成に関する基礎的研究

— 国語科の新しい授業づくりの視点 —

研究代表者 東京学芸大学国語教育講座 大熊 徹 附属世田谷中学校 笠井 正 信
研究同人 千田洋幸、黒石陽子、山田有策、佐藤正光、北澤 尚、石井正己、宮寺庸造（東京学芸大学）、木下ひさし（成蹊小学校）、小山恵美子（東京女学館小学校）、浅見優子（附属竹早小学校）、中村和弘、福田淳佑、吉岡裕子（附属世田谷小学校）、中山美由紀（附属小金井小学校）、野中三恵子、扇田浩水、村上恭子、鍋島尚子（附属世田谷中学校）、石川直美、愛甲修子、工藤哲夫、杉本紀子（附属大泉中学校、附属国際中等学校）、宇佐見尚子、浅田孝紀、仁野平智明、鈴木芳明、中山至、西村諭、若宮知佐（附属高等学校）、高松美紀（東京都立九段高等学校）

1. はじめに

1. 1 研究の目的

本研究の研究主題は「国語力向上を図る学校カリキュラム作成に関する基礎的研究」である。東京学芸大学と附属学校、外部の私立小学校とが連携を図り、国語科教育、情報教育、日本語・日本文学研究、附属学校図書館司書などが共同で「国語力向上」を追究するプロジェクトとしてスタートした。その目的を次のように整理した。

- (1) 国語力をどのようにとらえるのか、明確にすること；言語運用能力だけでなく、学習内容としての言語文化や言語知識などを検討する。また、小・中・高12年間を見据えた（さらに大学まで含める）国語力を育むための国語教育の構造化を図る。校種を超えた関連性とそれぞれの校種の独自性を検討する。
- (2) 授業づくりの新しい視点を検討する；言語技術だけ、作品だけという従来型の国語教育観から学び手を支える「授業」の発想のもとに授業づくりのシステムを検討する。
- (3) 教員養成や現職研修のカリキュラムに関連づける；これからはますます教師の力量が問われる。そこで、国語科の教科構造を明確にし、授業づくりやカリキュラム開発に生かせるようにし、教師の授業づくりの力の向上を図ることで教員養成カリキュラムとの関連を図る。特にこの目的は、大学の教科教育及び教科専門担当者と附属学校の実践者との連携を図り、「国語力」向上を図るカリキュラムづくりとその開発能力を持った「教師力」に関する基礎的な研究を行う。基礎的な研究として、現状の課題を明らかにしていくことや従来からの小中高一貫の視点を持つ国語教育に関する成果をまとめて提案できるようにする。それらを教育実習や現職研修に資するような体系化を図ることが関連してくる。

1. 2 研究の背景

平成16年2月の「これからの時代に求められる国語力について」（文化審議会答申）は、「国語」の内容を明らかにしそれを「能力」として位置づけようとした。また平成20年告示（予定）の改訂学習指導要領にうたわれる全ての学習活動の基礎として、実生活に生きてはたらく「言語力」を教育課程の中心にすえるという方針が打ち出されてきた。これら「国語力」「言語力」と呼ばれる、能力としての「ことば」とはそもそも何なのか、どのようにして習得されるものなのか、分かったようで明確なものになっていないのが現状といえる。OECDによる調査結果の「PISA型読解力」という「ことば」の力も具体的に何をどのように指導すればよいのか、不明瞭なものとなっている。あちらこちらから「国語力」にまつわる用語が飛び交う中、あらためて国

語科の教育内容とその方法を明確にする必要に迫られてきた。現場の実践的な研究と大学等の教育科学の研究との連携の重要性が増してきた。

1. 3 研究の進め方

- (1) 第1年次(申請年度)；国語力の分析と教師の授業づくりの力との関連についての実態調査と第1次実践。国語力構造モデル、教師の授業づくりの力のモデルの作成を行う。
- (2) 第2年次；国語力の構造を生かした国語科カリキュラム作りの実践と検討を行う。それをふまえ、国語力向上の学校カリキュラムを作成する。
- (3) 第3年次；国語力向上と教師の授業づくりの力との関連についての検証を行う。教員養成(現職研修)プログラムの提案に向けて検討する。

各年次ごとに報告書作成とともに授業実践(授業研究会の形で)を公開することを通して外部評価を受ける。

第1年次の具体的な課題としては、重点課題を「国語力をどのようにとらえるか」にしぼること。次のテーマ別グループを作り研究を進めること。この二つの観点から研究を進めた。

【各グループの研究主題と研究内容】

A 目標論的な追究(学力、評価etc)のグループ	基礎・基本としての知識・理解・技能と「話す・聞く力」「書く力」「読む力」の分析。併せて文化審答申、PISA読解力などについての分析と評価についての検討を行う。
B 内容論的な追究(古典、文学、批評、言語etc)のグループ	B-1【古典】小グループ；古典(古文、漢文)教材のねらいはどこにあるのか。また、どのような国語力を育てているか。「国語の文化的な事項」の検討を通して、国語科の内容論としての検討を行う。
	B-2【文学、論説】小グループ；文学教材がどのような国語力を育てているか。その教材開発の視点や方策の検討をする。批評や論説などの教材を通してどのような論理的思考、批評力育成を図っているのか、これらの教材の位置付けについて考察する。また、説明的文章の読みの内容的な価値についての検討をする。
	B-3【言語生活・言語体系】小グループ；国語力向上との関連から音声言語指導や表現指導の位置付けや国語力の基礎としての「言語」そのものに対してどのような認識を育むかについての検討をする。
C 方法論的な追究(授業、学習、カリ開発)【小・中・高の関連、情報活用能力と国語力】グループ	小・中・高の12年間を考慮してそれぞれの校種の独自性や間をつなぐ関連性を分りやすく整理する。また、その根幹をなす図書館教育やコンピュータを中心とする情報教育など、国語科教育の新しい領域の検討をする。

各研究グループがそれぞれに検討する、学力論、内容論、方法論をもとに総合した形で、本研究は進められる。成果としては、授業づくりの新しい視点の提言や教師教育の内容の再検討への示唆をめざしている。3カ年の計画と多くの分野の参加からなかなかまとまりにくいだが、幅広い研究成果が期待できる。

2. 研究の内容

2. 1 「国語力」に関する問題点と課題

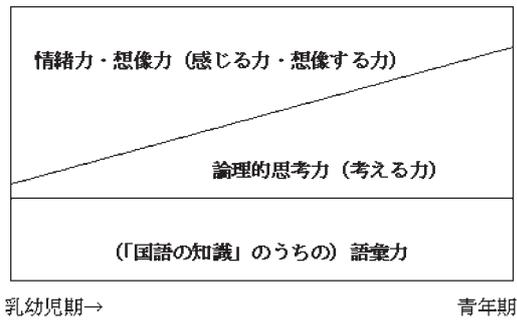
2. 1. 1 『発達段階に応じた「国語教育における重点の置き方」』のイメージ図の作成

平成16年2月3日に出席された文化審議会答申の中で、『発達段階に応じた「国語教育における重点の置き方」』として、下に示したイメージ図が出された(図1)

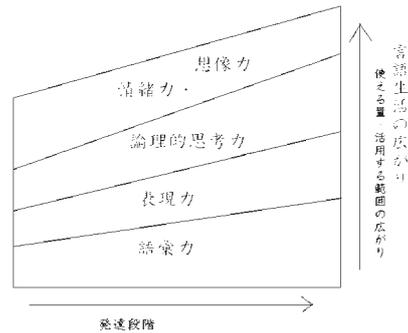
それを参考にしながら、我々は独自のイメージ図を作成し(図2)、発達段階に応じた効果的な指導のあり方

を考えた。

(図1) 文化審議会答申より



(図2) 本研究会で作成したもの



横軸はともに児童生徒の発達段階を表しているが、(図2)では、縦軸を『児童生徒の言語生活の広がり』とし、使える量や、活用する範囲の広がりを表している。よって、(図1)では、全てに関連する項目であるという理由で示されていない『表現力』も図の中に示している。

現在の児童生徒の実態から、『情緒力・想像力』の育成をこそ重視していく必要があると考えている。今後は、その指導方法や時期についても研究をしていく。また、図の中で使用している『語彙力』などの用語も、その定義だけではなく、表現の仕方についても、検討の必要性を感じている。

2. 1. 2 「学習指導要領社会科(Ⅱ)(第七学年-第十学年)(試案)昭和二十二年度」の「一般社会」に見る「各教科等を貫く言語活動」

「学習指導要領社会科(Ⅱ)(第七学年-第十学年)(試案)昭和二十二年度」の「一般社会」では、「生徒がある一つの社会的な問題を解決する」ためには、「その教科的区画にとらわれなくて、いずれ教科で取り扱われたことがらにせよ、社会生活に関するものであれば、すべてこれを取り集めて、必要に応じて使う」という考え方で、「単元の展開」のための「いろいろの種類の活動」が挙げられた。「様々な読書の充実」「図表の読み取り」「討議」「朗読」「報告」「創作」など、「各教科等を貫く言語活動」といえる。以下に参考となるものを挙げる。

- (一) 目による活動 (1) 知識を探すための読書。(2) あらゆる重要な思想を選択し、自分のものとするための読書。(3) 楽しみのための読書。(4) 物を作るに必要な手引きを得るための読書。(5) 重要な資料を記憶するための読書。(8) 図表を研究して、その中に示されていることがらを理解すること。
- (二) 耳による活動 (1) 学級討議、報告、講義、自席からの話、劇、朗読、のように学習材料がことばで話されるのを注意深く聞くこと。
- (三) 口による活動 (1) 新聞記事・論説・詩・書物の一定の箇所、短い文書の報告など、学習材料を朗読すること。シュプレヒコールを行うこと。(3) 特定の報告をすること。あるいは自席で話をする事。(5) 討論に参加すること。
- (五) 文書の活動 (1) 集めた知識を分類し、組織立て、また考えたことを適当に表現する作文を書くこと。(2) 物語りを書くこと。(3) 方針・観点・問題を説明する作文(書評・論説など)を書くこと。(4) 詩や短い創作を書くこと。(5) 舞台劇あるいは野外劇の脚本を書くこと。(6) 知識を得るために質問の手紙を書くこと。(8) 学校新聞に学校活動について広告・標語・見出し・記事を書くこと。(9) 人が話すのを筆記すること。(10) 人が読むのを筆記すること。

2. 1. 3 国語学力をめぐる主要論文の検討（昭和20年から30年代を中心に）

国語の学力観は、政治的・社会的変化と密着して歴史の変遷を遂げてきた。明治期は実用・博学主義であったが、大正期には自由教育の影響を受けて人間形成・「文学鑑賞」が重視され、綴り方の芦田恵之助や、読みによる理解の深化を目指した垣内松三などが活躍した。昭和初期から終戦に至るまでは、国家主義の中、神話・古典・戦争教材が中心となり、「言語思想一体観」に基づき言語文化の面が重視された。

戦後の新教育は、アメリカ経験主義の教育理念に立ち、討議法や問題解決法を組み入れた単元学習法が強調された。価値ある言語経験や、読み方、書き方を分化しない総合的な学習活動の展開という考えに基づき、昭和26年の学習指導要領ではこの「言語経験主義」「単元学習」が宣言された。しかし現実には、生活問題の解決が中心となり、問題学習の名のもとでの総合的な活動で何を得させたか不明で、教科としての基礎学力が低下したと指摘され、「騒々しい学習」「はいまわる実践」と批判された。昭和31年、全国学力調査が実施され、33年、教育課程審議会答申で「基礎学力の充実」が打ち出された。33年の学習指導要領では「日常生活に必要な国語の能力を養い、思考力を伸ばし、心情を豊かにして、言語生活の向上を図る」と、知識・技能・態度の強調、学習事項の明示化、系統的な技能養成が意図された。飛田（1965）は、これ以降「経験主義か能力主義か、総合主義か分析主義か、単元学習か系統学習かが一時実践界の中心問題となった」と指摘している。

これら当時の一連の議論は、特にPISA（2003）調査結果以来盛んになった、現代の学力低下への指摘と、総合的な学習批判、「読解力」「国語力」の向上に関する議論と重なるものが多い。学習の基礎教科としての国語科への期待、学力低下の真偽に関する疑問、学力自体の再検討なども共通している。当時すでに城戸（1951）が、文章理解や経験を合理化するために論理的思考訓練の必要性を指摘し、西脇（1954）が経験主義と要素主義との両者の止揚を提唱するなど、当時の議論や主張の中に、現代の国語力検討への示唆が読み取れるのではないか。現代の学力論争の背景には、国際競争力向上など時代の要請があるが、時代の流れの中で冷静に国語力を検討するためにも、学力に関する主張の変遷と議論を今一度検討する必要がある。1）明治図書出版 論文集 構成 第3巻（1933）

2. 1. 4 「国語力」探求の問題点と今後の課題

「新しい学力」「生きる力」からはじまり、「人間力」「国語力」さらに「言語力」とこれからの国際社会を生き抜く能力の開発（育成）が叫ばれ続けている。それらは、当然すべての子どもたちがこれからの社会の変化や自身の現状を踏まえ、一人ひとりの人格の形成と国家や社会の形成者として育成されるという目的の上に立った「国語力」であり「人間力」である。そこには、物事を考え判断していくための基礎となる「知識・技能」も当然含まれている。それあらを活用して認識を深め適切な判断をする「思考」していく力がある。

そのため、「国語力」を構造化して考えていく必要がある。また、話し方、読み方などの基本的な技能のようならえ方だけでは網羅できないことは当然のことであるので、諸要素の関連を明確にして構造化を試みた。一方、広く理解を求めめるために単純化を図る必要もあり、実践の経験を整理しながら、モデル化を図った。小学校や中学校、高校、大学の「国語力」育成の現場に立つ、教師や司書、情報助手などのそれぞれの経験としての蓄積を整理して、「国語力」の実態を明らかにしていくことがますます必要になってきた。

2. 2 古典学習の問題点と課題

2. 2. 1 研究の方向

古典の学習指導・教材の研究に関しては、チーム内での話し合いをふまえ、

- ① 現状を把握した上で問題点を抽出し、現行の学習指導方法・教材観の見直しを図る。
- ② 現行の教科書に採録されている教材を使用しつつ現在の問題点の解決・改善に迫れる授業案、または現

在の教科書に採録されていない新たな教材を開発し、授業実践を行う。

③ 実践した授業をふまえて、生徒にとって充実した学習が可能となる新たな授業案・教材を提案する。
という順序で研究を進めていくこととした。

今年度に関しては、それぞれの立場から現在の生徒（中・高生）たちが、古典学習に対してどのような姿勢を持っているか、また古典学習に際して必要な知識をどの程度持っているのかを報告した。また生徒の実態を把握するために、古典学習の導入時期にあたる中学1年生に対してアンケートを行った。

2. 2. 2 現状と問題点

生徒の古典学習の現状について、各校の教諭からの報告で共通して挙げられたのは、中学生においても、高校生においても古典を学習するための基礎的な知識が欠けているという点である。教材となっている作品の背景となっている時代・作者、あるいは教材となっている古典作品が現代においてどのような昔話となって伝えられているかということも、知識として根付いていないという見方が多い。また、古典学習に対する姿勢も年々意欲が低下しており、「古典のおもしろさ」を味わう段階には遠いという評価も多く挙げられた。指導者である教員の目から見たこうした生徒の現状・問題の背景にあるものは何であるのか。一つには古典学習・理解の基礎となる知識、例えば昔話にふれる機会や昔話への興味が低下しているのではないかという見方が挙げられた。

果たして現実はいかなるものであるのか。現在の生徒たちは古典学習に取り組む以前にどの程度、基礎的な経験を積んでいるのか、それを把握するために、先述の通りアンケートを行った。

広く現在の生徒たちの状況を把握するには、対象数を増やし複数の校種にわたって行わねばならない。がしかし、今回はアンケート項目の妥当性等を検討するために、試用版として、附属国際中等教育学校の1学年の生徒107名を対象として行った。アンケートは無記名制で行い、選択肢部分と自由記述部分を設けた。また入学前に海外で学習を経験した生徒も多いため、在外経験の有無に関しては選択肢で区別できるようにした。以下に質問項目と結果の一部を挙げる。

- 1 中学生になる前に、次の話を本で読んだり、人に聞かせてもらったりしたことがありますか。TVやDVDで見たことがある場合でもかまいません。
ア 桃太郎 イ 金太郎 ウ 浦島太郎 エ 酒吞童子（頼光四天王） オ かぐや姫 カ 姨捨山
キ ヤマトタケル ク 天の羽衣 ケ 義経と弁慶（牛若丸） コ 虫めづる姫君
サ 四谷怪談（お岩さんの話） シ わらしべ長者
- 2 中学生になる前に、次の作品や人物・言葉について知っていましたか。
ア 源氏物語 イ 枕草子 ウ 竹取物語 エ 平家物語 オ 徒然草 カ 紫式部 キ 清少納言
ク 源氏と平家 ケ 吉田兼好 コ 松尾芭蕉 サ 小林一茶 シ 奥の細道 ス 史記 セ 三国志
ソ 項羽と劉邦 タ 劉備・関羽・張飛・孔明 チ 論語 ツ 孔子 テ 杜甫 ト 李白 ナ 矛盾
ニ 五十歩百歩 ヌ 蛇足 ネ 推敲 ノ 覆水盆に返らず ハ 四面楚歌 ヒ 守株（株を守る）
フ 桃花源記
- 3 中学生になる前に古典（古文や漢文）を読んだり、勉強したりしたことがありますか。ある場合には、どこ（学校・塾・家）で、何を勉強したか、書いて下さい。
- 4 昔話と言え、何を思い浮かべますか、思いつく話の題名を書いて下さい。
- 5 古典に登場する歴史上の人物の名前で、知っている人物の名前を書いて下さい。

選択肢に挙げた項目は、現行の中学校で採択されている教科書（複数社）と高校で採択されている教科書（複数社）に採録されている教材に関連する項目を中心とし、およびチームのメンバーである教員が基礎的知識としてあるべきと判断した数項目を追加した。なお、対象生徒は107名であるが、当日欠席者がいたため有効回答数は104名である。

細かな数字はここでは省略するが、いくつかの結果についてふれておきたい。

- (1) 1の問に関しては、「桃太郎」「金太郎」「浦島太郎」「かぐや姫」を知っている生徒は非常に多い（在外体験生徒を含む）。ただし、細かな数値にこだわれば、「桃太郎」や「かぐや姫」を知っていると答えたのが100名超であるのに対し、「金太郎」は87名と90を超えない。また生徒の発言を付記するならば、「金太郎」の名前は知っていても、それが「坂田金時」と結びついている生徒は少なく、ストーリーも説明できる生徒は多くなかった。「桃太郎」「金太郎」「浦島太郎」「かぐや姫」に次いで多かったのは、「ヤマトタケル」54名と「義経と弁慶（牛若丸）」62名である。ただし、これもいつの時代の何をした人物かと問われて、確実な説明ができるという生徒はそう多くない。「姨捨山」「天の羽衣」「わらしべ長者」に関しては、知っている杜答えた生徒はそれぞれ4割に満たない。一方、知っていると言った生徒が少なかった項目は「酒吞童子（頼光四天王）」と「虫めづる姫君」「四谷怪談（お岩さんの話）」であり、それぞれ一桁を超えない。しかしこれらの項目に答えた生徒の多くは他の項目のほとんども知っていると言っており、話の内容まで概ね知っているようであった。
- (2) 2の問に関しては、古文に関連する項目には知っているとする回答が多く集まったが、ゲームや漫画になっているものも多いはずの漢文の関連項目については、知っているとする回答は少なかった。ただし、古文に関しても、歴史の勉強をしているときに名前だけは聞いたことがあるという程度のものも多く、どの程度までを「知っている」としているのかは回答によって違いがあるため、一概に古文に関しては知識があるとは言えない。

3の項目以降に関しては、自由記述回答を整理している段階であり、別の機会に報告することとする。

今回の調査は限定された数の試験的アンケートではあるが、特徴的なのは、生徒たち本人は「知っているか否か」と問われれば「知っている」と答える場合が多いことである。しかしながら、内容を問われたり説明を求められたりしても、十分な説明ができず、その知識や経験が古典の学習に活かされてこないのはなぜなのか。また、従来「よく知られている昔話」とされてきた話の中でも、現在は半数以下の生徒しか知らないものがある。その数字は何を示しているのか。今後はこの点を含めて古典学習の問題点をあきらかにし、新たな古典学習指導の方法・教材の在り方を探る必要があるだろう。

2. 2. 3 中学校での古典学習における課題

中学校での古典学習のねらいは、「古典入門」「古典にふれる」「古典に親しむ」等の単元名に象徴されるような古典への導入としての役割を持っている。また、「読むこと」の領域の学習として、音読・朗読を通して文語文、古典になれる学習や「鑑賞」として物語を楽しむ、親しむ学習の単元を配列している。ただし、教材としては、竹取物語、平家物語、枕草子、徒然草、奥の細道、故事成語、論語、唐詩など固定した教材ばかりで、中学生の興味や関心、発達に応じた教材の開発が待たれる。学習活動も工夫して、古典の意義にふれるような学習活動が開発されるべきだと考えられる。そのような教材開発や学習活動の工夫を妨げているのは、教科時数の問題にある。3カ年で30～40時間程度しか配当できない現状を考えると、読書活動との連携や他教科・領域との関連を図るような工夫が必要となってくる。

附属世田谷中学校での実践は、総合的な学習の時間、選択教科国語（学校選択）と関連して、「日本語・日本文化」領域を構想し、国語科の授業だけの学習を超えた単元の開発を試みている。

- (1) 「竹取物語」調べ学習；「竹取物語」をさまざまな観点の資料から解釈しながら読む学習。
- (2) 「平家物語」声に出して読む；朗読のために平家物語について調べ、一人ひとりが解釈をする学習。
- (3) 「おくのほそ道」全文挑戦；序文の暗唱と、一人ひとりが文庫本による全文の読破の学習。

本来の教科の学習を基本として、さらに課題を追究していく探求型の学習に展開する単元を構想している。

2. 2. 4 高校での古典学習における課題

高校では、授業において学んだ教材が有機的に結びつき、日本文化の流れや、日本における中国文学の享受のあり方に、興味を持てるような教材を開発していきたい。その取り組みの一つとして、まず古文と漢文で影響関係のある教材の授業実践を行いたいと考えている。古文では漢文をもとに翻案した作品が数多くあり、それらを教材化することは、広い視野から古典を捉えることにもつながるのではないだろうか。また、教材相互の関わりや違いを意識することは、一つ一つの教材の読みを深めるためにも、有効であろう。

具体的には、古文教材『伽婢子』と漢文教材『剪燈新話』を組み合わせた授業実践を考えている。そして、古文と漢文を比較することで、その教材における世界観を、より主体的に考察することができる授業のあり方を提示したい。古典や日本文化に対する関心が希薄になりつつあることに対して危機感を持ち、古典を学ぶとで、より文化への興味関心を高める授業のあり方を模索することが今後の課題である。

2. 2. 5 これからの国語教育への課題

数年来、重点研究の一環として国語教育の再構築、提言をテーマに、大学、附属学校のメンバーと検討を重ねてきた。昨年暮れの研究会で、これまで考えてきた国語教育の将来像を述べたところ、一つの提起とするよう進められたので、ここに短くまとめた。結論は、領域の広域化と、内容理解の深化である。

昨年、世界における日本の教育水準が発表され、日本の教育における内容の理解、考える力が問題とされた。国語教育については、文章読解力、表現力が劣っているとされた。文章読解力の問題は以前ならば読書量を増やすことで自然に解決する子どもも多かった。しかし、以前と現在とで少し違うことは、読解力は文学作品や随筆についてよりも、評論や新聞記事のような報道文の理解力により重きが置かれるようになってきたことである。総合的な学習もあって、国語力は環境問題や政治経済問題に取り組むうえで、資料を読み込み、把握する力として重要視されてきている。表現力は問題のポイントを押さえ、合理的、効果的に人に伝える能力として重要視されてきている。さらに課題への関心を深め、学習意欲を高めるという観点から、教科横断的な内容の教材が求められてもいる。

例えば、「コンビニで売っている弁当の食材はどこから運ばれてくるか」という課題。資料やインターネットを使い、「しゃけ」はノルウェー、「鶏肉」はブラジル、「レタス」はエジプトが産出国であり、そこから日本へ運搬される輸送船や空輸の費用や使われるエネルギーを調べ、輸入食材に頼る日本の食料供給態勢の是非を考えるとといった内容を展開させるものである。これはTV番組の一部であるが、これからの教育を先取りしているように思われる。このような内容を調べるためには、事典や子ども向けの年鑑だけでなく、新聞記事や専門的な文章にも当らなければならない。課題解決能力を伸ばすためには、学年毎の指導要領から離れて難しい漢字や表現も辞書で読み解き、内容を把握し、ポイントを押さえる。一見すれば社会（地理、政経）の授業のようであり、エネルギーや環境では理科の授業のようであるが、その根本となる読解力と意見をまとめる文章力、プレゼンテーションは国語の範疇である。

このような学習は、国語教師に広領域の分野への対応と専門用語や高級語彙への理解を要求する。このような教育が、今や国家的な立場から求められていると考えられる。とすれば、大学の教員養成においても文学に偏向せず、広領域に対応した文章読解力や指導力を身につけるカリキュラムが必要となってくるかと考えられる。

2. 3 現代文（文学、批評、評論）学習の問題点と課題

2. 3. 1 現代文の領域に求められる国語力

ここでは、グループで検討してきた「国語力」の理念を明確にしていきたい。文化審議会答申の「これからの時代に求められる国語力について」で想定されている「国語力」を基盤としながらも、グループとして新たに提案する点を明らかにしたうえで規定していく。

Bグループは新たな教材のもつ可能性を探ってきている。それを具体的に示すために教材と単元をある程度想定しながらどのような「国語力」をつけるかを話し合ってきた。初年度は、現代文で育まれるべき力を規定すると同時に、実際にそれを可能とするためにはどのような単元が望ましいかを各自が提案していく。たとえば、相手の気持ちや文学作品の内容・表現、自然や人間に関する事実などを感じ取ったり、感動したりできる力は、国語の知識や教養・価値観・感性などを基盤として発揮されるといわれている。これらは生涯を通じて形成されるものでもあるが、ここでは学校教育における国語科の担う役割を中心に考えていきたい。

現代文の領域では、論理的に考える力や、内容を深く理解し感じる力、想像する力が重要である。それらを身につけるための教材の発掘と、単元の工夫を課題としてグループで研究協議を重ねた。簡単に読解でき、多様な読みの可能性のない教材ではなく、知識や教養を必要としたり、話し合ったりすることを通して読解力をつけることのできる教材を提案することを共通の理念とした。すらすらと読むことができ、なんの抵抗もない読書を多くこなすよりも、自分と向き合うきっかけや、謎を解明していくプロセスを通して、自分なりの納得をすることで、物事を理解する力を身につけることができると考えたからである。さらに、伝統的な文化を理解・継承することや、地域社会における多様な方言など、内容と文体との両方に対する理解を深めることも、文化の中核としての国語を身につけるために重要である。

教材の内容に関しては、社会的な場に関わっていくかを考える教材の必要性を感じている。たとえば、評論への批判的な読みの力をつけることを通して、事故・脳死・メディア言説・在日・ハンセン病・戦争などといった、社会の様々な問題とどのように向き合っていくかを思考する力をつけることができる。

課題としては、他教科との関わりと差別化、特に社会科の領域との違いを明確にすることが重要である。「国語力」をつけるという目的であるため、あらゆる社会問題を普遍的に教材に並べる必要はないが、これらの問題を、生徒がリアルなものとして受け止め、追体験可能にするための想像する力の育成にもつなげていくことができる。

また、文学を教材とするうえでの重要な視点として、文体の問題がある。近代文学の文体にある抵抗感をバネに、何を学ばせることができるのか。口語体と文語体が乖離したところから近代が始まっており、現代の生徒にとって近代はすでに古典ともいえる。その文体を文化としてとらえ、同時にストーリーそのもののおもしろさを教授していくことで、極めて文学的な要素を取り込んだ作品も教材科しうるのではないだろうか。たとえば中学生には読むことが困難な原文も、学習になるような口語訳を教師が書き、教材科することによって学びは成立するであろう。深い知識と教養をもって初めて理解することができる文学との出会いには、学校教育の果たす役割が大きい。また、単に内容重視のテーマ別で教材を並べるということに陥ることなく、様々な切り口で教材を扱い、価値づけることも新たな課題である。一つの作品ではなく、複数の作品を読み比べてある問題について多方向から考えることも方法の一つである。こういった「国語力」の理念を前提として、ふさわしい教材を意識しながら、単元を構想した。

2. 3. 2 提案する単元構想（教材の傾向とつけたい力）

ここでは、新しい教材の価値を見だし、単元を構想することで、つけるべき国語力がどのように備わるかということを説得力をもって提案していくことをねらいとしている。

2. 3. 2. 1 詩と詞を読む

詩を読むというのは中学生にとってあまり馴染みがなく、時代を遡る作品ほど読みにくさが増し、理解しがたいイメージがある。しかし、先人たちの築いた文学を味わい、感性や情緒を培うことで、詩に対する苦手意識を克服し、理解する力を育む単元を提案したい。

近代の文学の詩を自ら読んでいる生徒はほとんどいないが、日常では歌の詞を好んで毎日のように聞いている。言葉への欲求は現代でも変わらず確かにあるといえるだろう。そこで、身近な歌の歌詞を入り口として、近代文学の詩を比較・評価する単元を構想していく。一読では読解しがたい詩を、内容を深く理解し感想を自分の言葉で語れることを単元の目標とする。教室で詩を読むということは、家でくつろいで聞いたり、歩きながら携帯する音楽の歌詞を読むこととは目的も手段も異なる。詩を味わう上で重要な視点として、作品の価値をどのように位置づけるかという客観的な視点があるが、中学生には文学史に対する知識でそれを説明することは難しい。そこで、生徒にとって身近な現代の歌と近代文学の詩の両方を取り上げて鑑賞し、評価の一視点を与える。たとえば、映画「ゲド戦記」の挿入歌として話題になった「テルーの唄」（作詞宮崎吾朗）は萩原朔太郎の「こころ」に着想を得てつくられたものである。再評価する側とされる側の比較を通して、文学史上の一元的な価値の押しつけではなく、自ら評価する基準を生徒の中に芽生えさせたい。そこから詩と詞に語られているもの両方への理解を深めることができると考える。さらに、これらの教材を本歌取りやパロディ、著作権といった社会的な問題について考える機会へとつなげることができる。そして、自分が興味をもっている歌の詞を紹介することも経験させ、普段の生活で聴く言葉を通して語られているものを、改めて評価してみるという体験を味わい、仲間と共有することの面白さを学ばせたい。

単元全体を通して、言葉と、それに興味をもつ自分とを認識するきっかけをつくりだし、豊かな感性を培いながら、文学的な知識・教養の視点も獲得できる授業を展開していきたい。

2. 3. 2. 2 批判的思考力を育成するための単元構成

インターネットの普及などによって、情報は大量化かつ多様化し、複雑化してきている。インターネットは、何者とも知れないひとりの情報発信者による表現を、見ず知らずの誰もが受信できるという、従来、存在しなかったタイプの情報である。発信者の知的背景や発信意図がわからないままに、その文章を読むことが求められる。また、従来の活字メディアにおいても情報の大量化・多様化は進んでおり、雑誌などは実に数多くの種類が存在し、選択肢は増える一方である。子どもたちが日常的に触れている文章の多くは、こうしたインターネット上や雑誌のものであり、これらの中には粗削りで瑕疵が目立つ文章が少なくない。情報自体の正確さという点での危うさを含み持つものや、論理的な問題点を含む文章が、数多く存在しているというのが実状である。軽妙さがもてはやされる昨今の出版事情を鑑みるに、書籍の場合とても同様の懸念がないとはいえない。

文化審議会答申の「これからの時代に求められる国語力」の一つにも、『『事実』や『根拠の明確でない推測』を正確に見極め、さらに、内在している論理や構造などを的確にとらえていける能力』というものが示されている。文章を批判的に読み、確かな思考力をもって論理を的確に理解・判断できる能力の育成は、メディア・リテラシーの問題とも関わるものであり、今日の国語教育においてきわめて重要なことの一つである。

従来、批判的に読むことは、内容・論理に対する正確な読み取りがなされた後に行われるものとして、扱われ検討されることが多かった。もちろん、モデル無くして学習者の中に自然発生的に論理が生ずるわけではない。もちろん、明確な論理構成による文章を読んで論理を学ぶことは必要だ。しかし、批判的に読むことは、それとは別の意識によってなされる営みと言うべきではないか。批判から学ぶためには、まず、批判をすべきなのである。現在は、それにふさわしい教材を吟味している段階である。そして、好悪レベルや揚げ足取りに終始しない、筆者の意図に寄り添ったうえでの批判のあり方を学ぶことができるような単元の構成を考えている。

2. 3. 2. 3 情報化社会における「表象」

現代を生きる私たちのもとには世界中の情報が集まってくる。さまざまなメディアを通して、「今／ここ」に居ながらにして世界各地の出来事を知ることができる。ほぼリアルタイムで、生々しい映像・音声を伴って……。一口に「高度情報化社会」と言うが、これはいったいどういう状況なのか。このような問題意識ののっとなって書かれた、岡真理、S・ソntagらの文章を中心に単元を構成し、情報化社会における「表象 (representation)」の問題について生徒たちに考えさせてみたい。私たちは、ともすればTVニュースが伝えるリアルな映像だけで出来事を知ったつもりになるが、それらメディアが伝える「表象」は現実を全て忠実に再現したものではあり得ない。何らかの価値観のもとに再構成された虚構であるはずなのだ。その点に無自覚のまま情報を享受している私たちのあり方を、改めて対象化し（「抵抗」として）捉えなおしてみたい、というのが本単元の第一のねらいである。

さらに、メディアにおける表象のみならず、私たちの根源的な「表象」行為についても考えさせたい。すなわち、私たち人間は言語や記号を使って現実を再現し続けていく存在だ。だが、そのような人間の本源的な表象行為にも物語化の作用は不可避であり、どうしてもなく虚構性がつきまとう。そうであるならば、人間は現実そのもの、体験した出来事そのものを、真に他者へ伝えることは不可能なのだろうか。この点について、ナチスドイツによるユダヤ人大虐殺（いわゆる「ホロコースト」）を対照的な方法論で作品化した二つの映画、C・ランズマン『ショア』と、S・スピルバーグ『シンドラのリスト』を比較鑑賞しつつ、人間の根源的な「表象」行為について、生徒自らに考えさせたい。「言葉」という表現媒体にこだわることなく、映像・音声を総合した作品を考察の対象としながら、「人間は現実そのものを表象しうるのか」について意見文を書かせることが単元の第二の目標である。

私たちが媒体を通して「情報」を受け取るということ、および私たちが現実を「表象」ということ——ふだん何の違和感なく透明なものとして行っているこれらの営為を改めて対象化することは、現代社会を生き抜いていく生徒たちに、将来の知的活動の基盤をなすような理解力・表現力を身に付けさせることになるだろう。

2. 3. 2. 4 新たな価値観の創造

21世紀に生きる我々にとって、20世紀がどのような時代で、どのような問題点があったかということについて、文学や評論の教材を通して、学習者に考えさせる単元ができないものだろうかというのが、現在私が考えている単元構想である。それらの問題について、できれば従来教科書ではあまり採用されて来なかった、あるいは教科書で採り上げるには難しいと思われてきた教材を使用して、授業ができないかと考えているところである。

20世紀も後半に入ってくると、日本を含めた欧米型の近代社会は、あらゆる面できしみや矛盾が生じてきた。科学技術の進歩や情報化社会の実現は、経済を発展させ国際化を促進し、欧米型近代社会に住む人々の暮らしを確かに豊かにはしてくれたが、一方では、二度の世界大戦や原爆投下に代表されるような悲惨な現実を生み出してしまった。民族間や宗教間の紛争はいまだに解決されることはなく、対立の概念は、人間同士の諍いを生んだばかりか自然とも対峙して、地球規模にわたる深刻な環境問題を引き起こしたのである。

明治維新以降、日本が目指して来た西欧型近代社会は、学問を発展させ、文化・芸術・教育・福祉・社会整備等のあらゆる面において、飛躍的な成果を挙げて来たといえるだろう。しかし、その近代化を急ぐあまりに犠牲になって来た側面について、21世紀ではもう一度その問題点を見直し、解決策が検討されなければならないと思う。例えば、明治以降、近代西洋的な思考以外の価値観や文化のあり方を軽視してきたことによって、今もなお近隣のアジア諸国とは友好な関係を築けないでいる。これからアジア諸国や世界の人々とどのような友好関係を築き、世界平和に貢献していけばよいのか。格差社会を生み出し、拝金主義やブランド志向が跋扈

する功利主義的な現代社会を改善するためにはどうすればよいかなどについて、考えさせる教材の発掘が必要であると思う。

そして、願わくば従来の近代西欧型の価値観を越える新たな文明のあり方が模索できるような教材が発掘されて、そういった事柄について考えさせる授業や単元のあり方が構築できないかと考えている。

2. 4 言語生活・言語体系の学習に関する問題点と課題

本章では言語事項に関する分野について、「国語力」として今後どのような観点で考えていくべきかを検討した上で、附属の教員がそれぞれの課題としている項目（漢字・文法・言語事項全般・音声言語と表現）について実践を展開し、それらを踏まえて大学の教員が総括するという形で考察を進めた。従来型の狭い国語力のみならず、広い観点も視野に入れ、具体的な提案を行いたい。なお、漢字と文法を愛甲が、言語事項全般を石川が、音声言語と表現を浅田が、総括を日本語教育との関連で北澤が、それぞれ担当した。また、言語生活をとらえる上で「民話」に着目し、言語生活を豊かにしていくことへの関心や意欲を高めていく学習について石井が担当した。

2. 4. 1 漢字・文法指導についての問題点と課題

(1) 漢字指導の問題点

① 問題点

漢字学習は、学習指導要領にあるように教育漢字やそれ以外の常用漢字を「読むこと」「書き、文章の中で使うこと」だけでよいのか。その習得（主にドリル学習や、小テスト）自体に困難を感じる生徒も多い。

② 新視点と実践

まず漢字学習を、ドリル学習によって「知識」を身につけさせるものにとらえるのではなく、「声符」を手がかりに、漢字をまとまりとして（体系的・論理的に）とらえる「力」つけさせるものにとらえる。それには「声符」によって漢字を集め、意味を抽出するといった学習活動が必要になる。そのような「学習内容」をカリキュラムの中にコンスタントに組み込んでいく。さらには、「語」としての漢字の働きをとらえ、熟語の構成をとらえる視点をもたせ、日本語という「言語」の構成要素として漢字を扱う学習をさせる。また第二言語の習得などを考えると言語の中の「文字」の概念を知る必要があると考える。そこから、「漢字学習」ととどまらず、アルファベットやハングル、点字や指文字などを文字としてとらえる活動に広げ、あらゆる「言語学習」の基礎とする。

③ 課題

教師自身が内容を理解し、生徒が楽しめる教材・学習活動を開発する必要がある。

(2) 文法指導の問題点

① 問題点

知識のための文法となってしまう、実際にそれがどう役に立つのか、生徒には実感されない。また、高校に入ってから古典文法を学ぶに先立ち、文法用語や概念は必要になるため、教えている側も義務感で教えている側面もある。要するに、生徒も先生も楽しくない。

② 新視点と実践

あくまで「読み」に役立つ文法として学習するため、用例は教科書の教材文や実際の文章とし、作例は使わない。文や文章をを理解するために「文法」という観点をもちいる。よって、単語の類別よりも、文の構成の理解を学習の中心とする。例えば、「は」の文と「が」の文の違いを理解し、読解に役立てる、助詞・助動詞の違いが、文の成立にどのような関わるか、文の意味がどう変わるか、など文法の有用性を実

感させる。知識の羅列を説明していくのではなく、「読み」を成立させる活動を中心とする。

③ 課題

現今の研究成果からは取り残されている「学校文法」への批判は多く、「読み」のための「文法」へと発展させるべきである。しかし、高等学校の入試に出題される、高等学校の古典につなげる、学説が一定しない、などの理由から「学校文法」を捨て去ることができない。これをどう乗り越えるかが、大きな課題である。

2. 4. 2 言葉に関する指導について

(1) 問題点

言葉（日本語）に関する学習は、言語事項などの取り立て指導をしているときは生徒の関心が高まるが、それが終わると関心が薄れてしまう。学習指導要領の目標にある「国語に関する認識を深め国語を尊重する態度を育てる」ためにも、言葉（日本語）に対する興味・関心を持続させる指導の工夫が必要なのではないだろうか。

(2) 新視点と実践

言葉（日本語）への興味・関心を持続させる方法として、帯单元的な言葉の学習を考える。具体的な方法として次の二つが考えられる。

① 折に触れて日本語の「今」を伝える話題を示し、自分たちを取り巻く言語環境に注意を向けさせる。

② 授業で扱った言葉に関する学習を継続させる。

これを、中学2年生の敬語の指導において実践している。

敬語の知識は授業で習得させることができるが、日常生活で正しく使えなければ学習の意味はない。しかし、それは、国語教室の中だけで達成できるものではないため、正しく使いましょうという姿勢作りで終わってしまう。しかも、敬語の授業が終わると、生徒の敬語への意識は薄れてしまうのが現実である。そこで、日常の言語生活の中で敬語の誤用が多いという日本語の「今」を伝え（①）、広告のコピーなどから、敬語の誤りの例を継続的に探させている（②）。敬語の学習は1学期末であったが、2学期末を迎えた現在でも、敬語の誤用に関して生徒から資料が集まっている。それを随時紹介しながら、敬語の正しい使い方について繰り返し学習させている。

このような方法をとることで、敬語の学習を継続させ、敬語の使い方に関する「アンテナ」を育てることが出来るのではないかと考える。さらに、これが敬語を正しく使うことにつながっていくことを期待したい。

また、①に関しては、新聞等から言葉に関する話題を提示することで、生きた言葉（日本語）への関心も高まると考えられる。これについては、1年次から継続的に実践をしている。

これらの学習について、帯単位として継続的に積み重ねるため、「通信」の形で生徒の手元に残している。

(3) 課題

日本語の「今」の話題を提供するためには、資料の収集が必要である。教師の、言葉に関するアンテナを敏感にしておくことが大切になる。

2. 4. 3 音声言語指導から表現指導へ

(1) 問題点

会話等の音声言語はもちろん、文章等の文字言語をも支えている言語の理論面を学ばせることで言語意識を高め、メタ言語能力を育成するとともに、それを応用した会話を作成して演じることで、実際の会話の仕組みについても意識し、言語表現能力を高める必要がある。

(2) 新視点と実践

上記の問題意識に基づき、授業に語用論を導入する。

平成19年2月下旬～3月上旬、高等学校第1学年3学級を対象に、単元名「会話の仕組みを探る一日本語語用論について一」とする授業を展開した。今回は、2分以内の短い会話台本の創作という手法によりながら、語用論的な認識を深める点に狙いがある。具体的な方法としては、語用論の観点のうち、「推意」に関する部分を中心に学習した後、グループに分けて短い台本を作成させ、そこに語用論的な観点を盛り込ませ、それを発表（演示）するという手順である。「推意」とは、省略されている表現や、本意とは裏返しになっている表現などを、前後の流れや自分の既有知識等を活用して推測し、会話の真意などを理解していくことである。たとえば、甲の「あっ、窓があいてる。」という言葉に対応して乙が窓を閉めたとしたら、乙は「甲は窓を閉めてほしいのだな。」という推意を働かせて次の行動に出たことになる。こうした言語的意識の養成のために、演劇の創作を具体的な活動として用いた。指導計画および内容は以下の通りである。

第1時 単元名と同じ表題のプリントを用いて、語用論（特に推意）について学ぶ。

第2時 グループで短い会話台本を創作し、校内サーバーに提出する。推意に関わる会話を必ず含ませた。

第3・4時 発表学習および語用論の有効性の考察。創作した台本を演示し、語用論的観点について説明する。演示には、パソコンとプロジェクタで台本を投影し、その前で演じさせた。

視覚的効果を上げて生徒の興味を喚起し活発な活動を行う点では、一定の成果を上げ得たと考えている。

(3) 課題

語用論の全体を理論的に学ばせるとなると、口語文法指導同様の忌避や、興味喚起の困難の恐れがあり、興味を持ちそうなところに限るとチップスの断片的指導になる。指導内容の体系化が今後求められる。

2. 4. 4 言語生活・言語体系の学習の活性化のために

本節の教材開発や問題提起に対する改善方法や解決策を提言する用意は今の私にはない。むしろ、私自身も、ここでは、東京学芸大学での授業や北京師範大学での日本語教育の実践を通して模索してきた文法指導の一端を述べてみたい。

まず確認しておきたいことは、元素記号を知らずに化学を語ることができないのと同様に、文法学習には文法用語が不可欠であることである。問題は、その文法用語や文法上の概念が日本語の文を分析する際になぜ必要なのか、指導者側に深い認識が求められる点である。（この問題に関しては、これ以上論ずる紙幅がない。）ともあれ、私は、大学の「国語科研究」という科目の中で、品詞の具体的な語例や文例として、以下のように、サラリーマン川柳を教材として用いたことがある。（実際の授業では、さらに多くの文法概念の説明のために、百以上の句を取り上げた。）

- ① 名詞「母シャネル娘はグッチ父□□□□」、②動詞「恋人はいるかと聞かれ『はい□□ます』」、③形容詞「『はい、はい』と□□□返事に□□□腰」、④形容動詞「厳粛に真摯に重く受け流す」、⑤連体詞「パパ似だと言われ泣き出す□□娘」、⑥副詞「□□寝てる帰ってみれば□□寝てる」、⑦接続詞「家を買って□□□□なにも買ってない」、⑧感動詞「『□□□お茶』呼ぶほど広い家欲しい」、⑨助詞「現代人水□汚して水□買う」（格助詞）、「一戸建まわりを見ると一戸□□」（副助詞）、「松茸はおいしくない□と子に教え」（終助詞）、⑩助動詞「『簡単に借り□□ます』がどう返す」（可能の意味を表す助動詞）

大学生に強烈な印象を残したこの試みが、小中学校の国語科の授業でも実践可能であるか否かは検討の余地があろう。内容が児童生徒向けではない、さらに、たとえ「くいつき」が良くても川柳の内容を面白がるだけで、本来の文法学習から逸脱するおそれもある。むしろ、「サラ川」は母語教育としての国語教育の場より、外国語教育としての日本語教育の場において、文法教材としてだけでなく日本社会と日本文

化についての理解を深めるために大いに活用されるべきなのかもしれない。(『日本語教材としての『サラリーマン川柳』』については、現在『日語学習與研究』中国・对外經濟貿易大学に投稿中。)

しかし、それにもかかわらず、自らの未熟な教育実践例をここで紹介してきたのは、言語生活や言語体系に関する魅力的な教材は、文学畑や国語畑にだけではなく、思いもかけない領域に潜んでいる可能性があるからである。私は、それこそが「言葉に関するアンテナ」(または感受性)を研ぎ澄ますことであると思う。

最後にもう一つ。国語教育だけでなく、ぜひとも日本語教育の教材・学習書・啓蒙書類にも注目してほしい。そこは、国語教育にも資する驚くべきアイデアに満ちた沃野であると信じるからである。

2. 4. 5 国際理解教材としての「アジア心の民話」

〔問題点〕2001年、松谷みよ子監修・野村敬子企画責任編集の「アジア心の民話」全6巻が星の環会から発刊されている。フィリピン・台湾・中国・ベトナム・インドネシア・韓国の6カ国の民話をまとめた絵本であり、次のような構成になっている。

- ①『オリーブかあさんのフィリピン民話』野村敬子編、三栗沙緒子絵
- ②『チュ・ママの台湾民話』野村敬子編、松田けんじ絵
- ③『少女が運んだ中国民話…栗田美和語り…』松谷みよ子編、三栗沙緒子絵
- ④『語りおじさんのベトナム民話』坂入政生編・語り、小島祥子絵
- ⑤『語りおばさんのインドネシア民話』杉浦邦子編・語り、本田厚二絵
- ⑥『キムさんの韓国民話』野村敬子編、藤田としのり絵

それぞれ、アジアとの深い関わりを持ちながら日本で暮らす方々の伝える民話に、現地での取材をして描いた絵が添えられて、1冊の本になっている。①・②・⑥は自らの国際結婚で日本に来た女性の語りであるが、③は母親の国際結婚で日本に来た少女、④は留学生に日本語を教える男性、⑤は娘一家の暮らす転勤先に通った女性の語りで、それぞれの本の作り方は一様ではない。しかし、帯にある「アジアの心／国際理解・やすらぎ／声を出したくなるこの本!」という点では一貫していて、20世紀末から急速に進んだ国際化の中で、これらの本はかけがえのないものとして生まれている。

今、急速な国際化が進む小学校において、中学年程度の子供たちの言語生活を育てるために、このシリーズを教材化してみたいと考えるのは、そこに国際理解に深く役立つ内容があるからである。なかには発刊に至った事情に複雑な経緯を持つ本もあるが、そうしたことに対する認識に立って、これらを教材化してみたい。それぞれの民話には、その国の人々に生きてきた思考が深く刻まれているので、国際化社会を生きる子供たちの、言語を通じた国際理解のために重要な意義を持つにちがいない。

〔課題〕例えば、①の「ピンドン」は、主人公の少年ピンドンが友達のいじめにあうが、森に入って出会った仙人のおじいさんやタマラウという山牛に助けられ、力強く生きてゆくきっかけを得る話である。タマラウがピンドンに言った、「まっすぐ頭をあげて、バナナの木みたいに、どんなにいじめられても、心の蕾ば大事にしてな。取ってはばめだぞ」という言葉は重い。フィリピン民話と日本語の出会いの中に生まれたこの本は、国際化が進む教室において、真の理解を深めるための大切な一歩になるはずである。今後、こうした民話の活用を組み込んだカリキュラムを積極的に考えてみたいと思う。(石井正己)

2. 5 読書活動・情報活用と「国語力」の関連についての課題

2. 5. 1. 読書記録振り返りの有用性についての仮説

読書は、平成16年2月3日に出席された文化審議会答申でも触れられているように、子どもたちの『情緒

力・想像力』『思考力』『表現力』『語彙力』など、いわゆる「国語力」の育成にかかすことのできないものであることは明らかである。児童生徒の読書生活をより豊かにするために、意図的・効果的な読書活動の取り組みが必要である。

学校図書館では日常的に、児童生徒が読書の記録をつけたり、子どもたちの借りた本の履歴を蓄積したりしている。これらを活用して、生活の中での読書の位置づけを自覚したとき、子どもたちの読書生活に何か変化をもたらすことが出来るのではないだろうか。

この仮説を出発点として本研究では、それらを有効的に活用していくための手立ての一つとして、記録をデータ化し蓄積していくシステムの開発に取り組んだ。

今年度は児童生徒にこれまでの読書ノートの記録や学校図書館にある読書履歴を振り返らせ、子どもたちが読書というものをどのように捉えているのか、実態把握を行った。発達段階によって、振り返りの形は様々であったが、自分の嗜好を再確認することで、読書への興味が高まっていると感じられた。特に、この傾向は小学校で顕著に見られた。

今回は個人的な振り返りであるが、読書記録を蓄積していくシステムを活用すれば、友人間の交流も期待できるのである。

2. 5. 2. 附属学校図書館における児童生徒の活動の実際

2. 5. 2. 1. 附属世田谷小学校の活動

学校図書館では子どもたちの読む経験を広げることに心がけている。司書はこのことから子どもたちの読む力と読解力がつくよう支援をしているが、その一つとして読書ノートを作り、全児童に取り組むよう促している。

以前、子どもたちは自分が何を借りたかという個人の記録が手元にないことを不便に感じていた。時折子どもたちが「貸出記録を自分で見ることができませんか？何を借りたか分からなくなってという申し出があった。そんないきさつで学校全体で読書ノートを使うということを行ってきたが、次第に持続して取り組んでいけるようになってきた。子どもが本について書くときに書名、著者名、分類を書くことで、自分がどんなジャンルの本を読んでいるか、どんな作家の本を一番読んでいるかが分かるようになる。これは後にレポートを書くようになった時、参考文献を書くうえでも必要事項としてくるものである。これには学校で借りた本だけではなく公共図書館で借りた本や自分の本を書くこともできる。この取り組みの結果、本に対する見方が変わってきたことや、子どもたちの読みが広がってきていることに気がついた。低学年から取り組むことにより、読んだら書くということが習慣化してきた。学級でも読書ノートを活用して簡単な読書感想を書くような活動も行っている。子どもたちは書き続けることにより書く力が確実に伸びていることと、感じる力が伸びていることにも気がついた。「??の本がありますか？」と訊ねてくる時に作者の名前で聞いてくる子どもたちも多くなってきた。低学年の子どもが絵本を探す時にも同じ現象がおきている。

今年度はこの取り組みの延長から、自分の読書ノートを振り返ってみるということを行ってみた。この結果、高学年では、あまり意識はしていなかったが、作家で読んでいるとか、シリーズものはほとんど読んでいない、もう少しレベルアップした本を読みたいなどと振り返って自分の読書をみることができた。2年生ではそこまで自分を分析して見ることができないのでこんな本を読んでいる。とか、こんなのが好きと言っていた。

2. 5. 2. 2. 附属小金井小学校の活動

附属小金井小学校では平成16年度から、毎年11月の読書月間では読書量調査を行うにあたって、学年に最低1学級は読書記録を取っている。書き始めた学級では子どもたちの読書の楽しみや励みになっていくので、

1ヶ月だけでなくそのまま続行することも多い。学校図書館で借りたもののみならず、家の本、友だちから借りた本、公共図書館の本など、読書生活全体を記録するという点で、読書記録の方が貸出記録より有効である。しかし、本校では統一された読書記録の様式はない。それぞれの学級や学年で、独自の様式を持っていたり、毎日課している個人記録の中に読書欄があったりと学級担任の裁量に任されているのが実態である。記録の他にも、朝の読書の他に、係や有志による読み聞かせや読書案内、一週間ごとの学級文庫の入れ替えなど各クラスの読書活動があり、学校図書館としてはそれぞれに団体貸出をしたり、個別相談に応じたりなどの対応を行っている。

今回、2、3、5年生各1学級で児童個人の4月から11月までの貸出記録を本人に渡し、そこから読書について自由記述をさせた。2年生(39人)では「おもったよりたくさんよんでいて、びっくりした。」という〈冊数〉にこだわる傾向(31人)があり、3年生(39人)は「今、自分が好きな本は」という〈現在の興味・関心〉として書名やシリーズ名を挙げ読書が楽しいという記述がほとんどの子にみられた。5年生(39人)はシリーズや作家へのこだわりを示すとともにもっといろいろな本を読みひろげたいという希望が記される傾向だった。

週1回の優先利用時間の〈図書時間〉と休み時間に子どもたちは学校図書館を活用し、本を借りる、返す、選ぶ、めくる、読む、お話を聞くという行動を習慣化させている。図書館としては「1人1冊黙って読む」とサイレント・リーディングの時間を奨励する一方、子どもたちの読書の成果を図書館内に掲示したり、ファイルにしたりして学級・学年を超えた「読書コミュニケーション」を図っている。日頃から学年や学級のニーズとともに個々の子どもたちの成長のニーズに応えられる選書をし、豊かな読書環境となる蔵書づくりを心がけている。

2. 5. 2. 3. 附属世田谷中学校の活動

4月、図書館では新1年生を対象に、1クラス1時間のオリエンテーションを必ず実施する。オリエンテーションではブックトークなどで楽しい本の紹介も必ずいれ、図書館が中学生生活にとって必需品であることをアピールすることになっている。また、日常的にも読書意欲を喚起するための働きかけとして、新刊や面白い本の紹介、2週間に一回必ず変えるカウンター横の展示コーナーをはじめ、図書館のあちこちにちょっとしたテーマでミニ展示等も行っている。選書には特に力をいれ中学生にとって魅力的な図書館であり続けるための努力をしている。

図書館の資料を使った授業も1年をとおして何度かあるため、多くの生徒に図書館は身近な存在とはなっている。しかし、貸出状況だけみれば、図書館でよく本を借りる生徒とほとんど借りない生徒の二極化が進んでいるように見える。そこで今回中学1・2年生を対象に、本人に手渡した貸出履歴と読書ノートをみて、読書生活を振り返るといふのを、このプロジェクトの一つの試みとして実施してみた。これは生徒ひとりひとりに自分の読書のありようを自覚させることに繋がったようで、自分の好みを分析したり、今後の希望を述べる生徒もいれば、あまりの冊数の少なさに愕然としたり、読書は嫌いだと言明する生徒もいた。普段無自覚に積み重ねている読書も、記録することで、次の読書へのステップや、友人たちとの読書を通じてのコミュニケーションにも役立つ可能性があることに気づかされた。また、図書館では本を借りていないが、他の手段で日頃から本に親しんでいる生徒も少なくないことがわかった。しかし、読んだ本の記録を書くのは中学生には面倒に思える作業でもある。そこで来年度はデジタルな環境での読書記録をひとりひとりが気軽に書き込み、それを自分の読書の変遷の記録として時々振り返ることを実施することにした。できれば、国語や他教科で時々読書課題を出してもらい、図書館としてはそのテーマに沿った多様な資料を提供するような試みをぜひしてみたいと考えている。

2. 5. 3. 読書記録蓄積システムについて

今回、「ORN オンライン読書ノートシステム」の開発に取り組んだ。本システムは、wwwサーバ上で稼働するWebページによるインタフェースと、データベースから構成されている。よって、生徒は学校や自宅から、自由に本システムにアクセスすることが可能である。インタフェースには、生徒用と教師用の2種類がある。

生徒用の画面と、各画面で可能な操作は、以下の通りである。(1) ログイン画面：ログインIDとパスワードの入力により、自分のノート一覧にアクセスできる。(2) ノート一覧：これまでの自分の読書記録一覧が表示される。記録のソート（本のタイトル、著者名、お薦め度、ノートタイトル、キーワード1～3、提出時刻、をキーとしてのソート）が可能である。また、各記録の編集画面と、(3)、(4)の画面（後述）へもリンクしている。(3) ノートの新規作成：新たな読書記録を入力する画面。クラス名、本のタイトル、本のジャンル（十進分類より選択）、著者名1、著者名2、読み始めた日付、読み終えた日付、おすすめ度（5段階）、ノートタイトル、ノート（感想本文）、キーワード1～3、オープン度（後述）を入力することができる。なお、オープン度は「公開（生徒同士が閲覧可能）」または「非公開（自分と教師のみ閲覧可能）」の二択である。(4) ノートの集計、検索：オープン度が「公開」となっている全生徒の読書記録を検索することができる。生徒名、学年（回生）、クラス、本のジャンル、おすすめ度、キーワード1～3、提出時間をキーとして検索することができる。

教師用の画面は、以下の通りである。(1) ログイン画面：ログインIDとパスワードの入力により、メニュー画面にアクセスできる。(2) 生徒情報一覧：生徒の、生徒番号、生徒名、クラス名1～3（3学年分）、趣味、の一覧が表示される。また、生徒情報を編集する画面へもリンクしている。(3) ノート閲覧管理：全生徒のノート一覧が閲覧および編集できる。(4) ノート集計検索：全生徒のノートを検索、閲覧、削除することができる。

2. 5. 4 読書記録蓄積システムの想定できる活用場面

読書記録をつける場面を国語の授業の中でどのような目標のもとに設定することができるかについて、現在の授業に当てはめながら提案していきたい。

読書活動を充実させるための授業の一環として、たとえば、テーマに沿った本を必ず一冊選んで読み、発表するというような活動を行っている。本の内容から情報を読みとり、発表することで、情報処理能力や書く力を身につけることがねらいである。その際、全員が、借りた本についての内容をまとめ、システムに打ち込んで公開することができれば、生徒同士が情報の交換をし合ったり、感想を共有したりすることがパソコンのデータ上で可能となる。そのメリットの一つに、自分と同じテーマの本を読んだ人がいるか、この本を読んだ人はどんな感想をもったのかなどを、簡単に調べられることがある。また、教師側も、どのような本を生徒が選び、課題を設定しているかなどの情報が、一覧で把握でき、データ化されているため、発表の班づくりの参考にしたり、生徒の選んだ本の傾向などをすぐに分析することができる。それによって、次への課題設定が円滑に行えることや、本の感想を提出させる方法として、システムに直接書き込ませることで一括で感想文を受け取ることができるなどのメリットがある。パソコンに直接文章を打ち込む時間を設定することで、情報の授業と連携してスキルアップをはかることもできる。

また、個人の読書の記録を教師が知ることで、現在の中学生在が自ら読んでいる本の傾向や、各生徒の読解力と読書の量・ジャンルとの関連などについても分析できるため、生徒の読書指導に生かすことができる。システムが実現すれば、国語の授業で共通して読む読書と、個人読書の両方の記録を残すことができるため、3年間を通しての自分の読書と感想を把握でき、評価する視点をもつことで豊かな読書活動につながると考える。

2. 5. 5 実践上の今後の課題

従来の「読みの学習」は、「読解力」の育成をねらった学習をさして、「読書活動」を育むことには直結していなかったと言える。「国語力」の一部として「読む力」という形で取り出し、豊かな読書人の育成という到達点を設定し、知識・技能としての「読み方」の学習とそれを活かす「読む」体験との統合が図れることが重要になる。読みたい本とじっくりと向き合うことができなくなってきたという危惧をよく耳にする。教室の「読むこと」の学習から、じっくりと本と向き合う体験を除くと、空虚なゲームのような読み取り訓練しか残らない。結果として、読書活動と読解力の育成を図る「単元」作りを見直すことと読書ノートのシステムをいつどのような機会でも活用できるかを検討する必要がある。中学生で実施するデータ化された読書ノートもデータの集積ばかりでなく交流や発信などの機能を発揮した行動的な学習活動を生み出していきたい。

3. 今年度の成果と今後の課題

附属小学校・中学校・高校学校の実践者と学部の教科教育学及び教科専門担当者とが連携し、「国語力」向上を図るカリキュラム開発に取り組む附属学校研究会プロジェクト研究の第1年次の報告である。研究の目的はもちろん「国語力」向上を図るカリキュラム開発であるが、そのカリキュラムを教員養成や現職研修のカリキュラムに関連付けることまでも視野に入れた研究である。

ここに、各グループの今年度の到達点を成果としてまとめておこう。

まず、目標・評価グループ。国語学力に関する主要文献を渉猟し、国語学力・国語力を明治時代から現代まで分析し、発達段階を考慮した本研究会の国語学力モデル図を作成した。古典グループは、中学1年生にアンケート調査をし、古典作品の背景となっている時代・作者さらに今の昔話との係わりなどの基礎的な知識の欠如、古典学習に対する意欲が年々低下してきていることを課題として捉え、古典を学ぶことで文化への興味・関心を高める授業のあり方を模索し、古文教材『伽婢子』と漢文教材『剪燈神話』と組み合わせた授業実践を構想した。現代文（文学、批評、評論）グループは、多様な読みの可能性のない教材ではなく、深い知識と教養をもって初めて理解することのできる教材の選定に取り組み、身近な歌の歌詞と近代文学の詩を比較・評価する単元、筆者の意図に寄り添ったうえでの批判のあり方を学ぶことのできる単元、情報化社会における「表象」の問題に関する単元、新たな価値を創造する単元などを構想した。言語生活・言語体系グループは、「声符」を手がかりに漢字をまとまりとして体系的・論理的に捉える力をつけさせる、日本語という「言語」の構成要素として漢字を扱う実践をし、あくまで「読み」に役立つ文法という点についての実践をした。言葉（日本語）に興味・関心を持続させる方法として、帯単元的な言葉の学習を実践し、音声言語から表現指導へと展開した実践は、演劇の創作を具体的な活動とし、そこに語用論を導入したものである。総括として日本語教育、民話への視点の拡張を提言している。そして、読書活動・情報活用グループは、読書ノート・読書記録をとる実践を継続し、「ORN オンライン読書ノートシステム」の開発に取り組んだ。

最後に、今後の課題である。

構想段階の授業は単元構成して実践することである。実践によって構想の価値を検証し、同時にそこから見いだせる国語力を分析・追究することである。ORNシステムの効果的な活用方法を検討し、広く実用化することも課題である。そして何より、各グループの捉えた国語力をまとめし、本プロジェクトの国語力を明らかにすることである。広く活用するためには単純化も必要となろう。その上で、小学校・中学校・高等学校そして教員養成・現職研修までものカリキュラムを開発することである。